

琉球使節の北京滞在期間

— 清朝との通交期を中心に —

深澤 秋人

はじめに

17世紀中頃から19世紀後半にいたるまでのあいだ、琉球の王権・国家は清朝と通交（＝朝貢）関係を成立させていた。首里王府は清朝が規定した貢期にのっとり、福州を經由して進貢使をはじめとする朝貢使節を北京まで派遣していた。朝貢使節の主要な任務は、琉球国王が皇帝に宛てた表文や奏文、礼部に宛てた咨文を提出すること、朝貢品を貢納すること、皇帝から琉球国王に宛てられた勅書や例賞品などの頒賞品を受領することであった。

北京における琉球使節の活動のなかでも、上記の任務のほかにメインイベントとでもいえるものは元旦の紫禁城太和殿前での皇帝謁見儀礼（＝朝賀礼）であった⁽¹⁾。すると、琉球使節は正月をはさんだ時期に北京に滞在していたことになる。この時期には朝鮮使節や暹羅使節⁽²⁾なども北京に滞在しており、太和殿後方の保和殿などでの宴会で同席することが少なくなかった⁽³⁾。しかしながら、清代を通じて正月に北京に滞在することは一般的だったのだろうか。正月に北京に滞在していない琉球使節はどのくらい存在するのだろうか。その場合、太和殿前での皇帝謁見儀礼に参加する機会などはあったのだろうか。

清朝に派遣された琉球の朝貢使節の全体像については研究の蓄積がある⁽⁴⁾。琉球使節は単独で上京したのではなく、中国側主導であり、中国側の伴送官が福州から琉球使節を引率した。近年、北京に派遣された伴送官のリストが作成され、制度的変遷についても論じられている⁽⁵⁾。しかしながら、それぞれの琉球使節がいつ北京に到着し、いつ北京を出発したのかという北京滞在期間については網羅的に把握されていないのが現状である⁽⁶⁾。また、北京における琉球使節の研究も存在するものの、必ずしも北京という都市空間を意識したうえで活動の様相が明らかにされているわけではない⁽⁷⁾。紫禁城のほかにも皇城や内城や外城における活動などミクロな視点による琉球使節の考察はいまだ不十分といえる。

一方、清朝に派遣された朝鮮使節についても近年研究が蓄積されている。なかでも朝鮮使節の北京滞在期間については研究の進展があった。夫馬進氏は16世紀末期から19世紀後半にわたって作成された33件の燕行録を検証し、それぞれの朝貢使節の北京滞在期間を具体的に示している⁽⁸⁾。

そこで本稿では、清朝に派遣された琉球使節の北京での活動を考察するための基礎的作業として、滞在期間の全体状況を明示するとともにその整理を試みたい。滞在期間を把握することは、北京における琉球使節の活動のみならず、ほかの朝貢使節の活動との比較など、ヒトの移動や交流の様相を具体的に検討するうえでの前提となろう。また、正月以外に北京に滞在した琉球使節の活動について、滞在期間中いつどこで皇帝に謁見していたのかを紹介してみたい。

1. 琉球使節の北京滞在期間一覧

明清交替期、琉球の王権・国家は1640年代の南明政権への朝貢と前後して、1650年前後には清朝とも通交関係を成立させるにいたった⁽⁹⁾。しかしここでは、清朝への朝貢が本格的に開始された康熙2（1663）年派遣の謝恩使（冊封）から、明治政府によって清朝との通交関係を停止され結果的に最後の朝貢使節となった同治13（1874）年派遣の進貢使にいたる琉球使節を検討の対象とした。1660年代から1870年代にいたるすべての琉球使節の北京滞在期間をまとめたものが表1である。

それぞれの項目について説明をしておきたい。使節の項目のなかで、貢期にしたがって派遣された進貢使や皇帝の即位を祝賀するために派遣された慶賀使のほか、謝恩使（冊封）とあるのは、清朝皇帝による冊封に対して派遣された謝恩使を示す。謝恩使（御書）とあるのは、皇帝による「御書」などの特別な賞賜に対して派遣された謝恩使を示す。北京到着日のなかには日付が○月○日以前とあり、日付が確定できていないものもある。その場合、○月○日は、琉球使節がもたらした琉球国王の表文や奏文を皇帝が閲覧した日など、琉球使節の北京到着を確認できる日付のなかでできるだけ遡及できるものを採用した。同様に北京出発日のなかで日付が○月○日以降とあり、やはり日付を確定できないものがある。その場合、○月○日は、滞在期間のなかでも後半にあたる紫禁城の午門前で例賞品が琉球使節に頒賜される予定の日などを採用した。また、北京出発日には予定日も含まれている。当初の予定日が変更された場合は○月○日から○月○日へと表記した。なお、典拠とした史料はまとめて表1の末尾に列挙した。

表1 琉球使節の北京滞在期間一覧

番号	使 節	北 京 到 着 日	北 京 出 発 日	正 副 使 など	備 考
1	謝恩使（冊封）	康熙3年7月5日	康熙3年8月15日	呉国用、金正春	
2	慶賀使	不明	康熙4年9月21日以降	英常春、林有材	*1
		【康熙5年の進貢使は派遣されるも上京せず、朝貢品は貢納】			
3	進貢使	康熙8年正月24日	康熙8年2月18日	呉文顕、王明佐	*2
4	進貢使	康熙10年8月22日以前	康熙10年9月24日以降	富茂昌、蔡国器	
5	進貢使	康熙13年正月20日	康熙13年3月16日	呉美德、蔡彬	
		【康熙13年の進貢使は三藩の乱のため派遣できず】			
		【康熙15年の進貢使は三藩の乱のため派遣できず】			
6	進貢使	康熙19年正月22日	康熙19年3月1日	陸承恩、王明佐	
7	進貢使	康熙20年11月4日	康熙21年2月14日	毛見龍、梁邦翰	
8	進貢使	康熙22年9月9日以前	康熙22年11月5日以降	毛文祥、蔡国器	

番号	使 節	北 京 到 着 日	北 京 出 発 日	正 副 使 など	備 考
9	謝恩使 (冊封)	康熙23年 6 月23日	康熙23年 9 月 6 日	毛国珍、王明佐	
10	進貢使	康熙24年10月15日	康熙24年12月 9 日	呉世俊、鄭永安	
11	進貢使	康熙27年 9 月17日	康熙27年10月13日	魏応伯、曾益	* 3
12	進貢使	康熙28年 9 月 2 日	康熙28年10月15日	毛起龍、蔡鐸	
13	進貢使	康熙30年 8 月12日	康熙30年10月 1 日以降	温允傑、金元達	
14	進貢使	康熙32年 9 月 1 日	康熙32年10月 3 日	馬廷器、王可法	
15	進貢使	康熙34年 9 月丁丑以前	康熙34年10月 2 日以降	翁敬徳、蔡応瑞	
16	進貢使	康熙36年 8 月24日	康熙36年 9 月23日	毛天相、鄭弘良	
17	進貢使	不明	康熙38年 9 月19日以降	毛龍図、梁邦基	
18	進貢使	康熙40年 8 月28日	康熙40年10月 2 日以降	毛得範、鄭職良	
19	進貢使	康熙42年 9 月 7 日	康熙42年10月11日	毛興龍、蔡元祥	
20	進貢使	康熙44年10月 7 日	康熙44年11月15日以降	温開栄、蔡肇功	
21	進貢使	康熙46年10月26日	康熙46年12月 5 日	馬元勲、程順則	
22	進貢使	不明	康熙48年11月17日	向英、毛文哲	
23	進貢使	不明	康熙50年11月26日以降	孟命時、阮維新	
24	進貢使	康熙52年11月 8 日以前	康熙52年12月 6 日以降	毛経九、蔡灼	
25	進貢使	康熙54年10月23日	康熙54年11月29日	馬献功、阮璋	
26	進貢使	康熙56年11月 2 日	康熙57年 3 月29日	夏執中、蔡温	
27	進貢使	康熙58年11月 9 日以前	康熙58年12月22日以降	向秉乾、楊聯桂	
28	謝恩使 (冊封)	康熙59年 8 月10日	康熙59年10月20日	向龍翼、程順則	
29	進貢使	康熙60年10月21日以前	康熙60年11月20日以降	毛廷輔、梁得宗	
【康熙61年の進貢使は派遣されるも進貢両号船が往路で遭難、福州に到着できず】					
30	慶賀使	雍正 2 年10月 1 日	雍正 2 年12月20日	翁国柱、曾歴	
31	進貢使	雍正 3 年 9 月15日	雍正 3 年10月26日	毛健元、蔡淵	
32	謝恩使 (御書)	雍正 4 年10月12日以前	雍正 4 年11月21日以降	向得功、鄭士綯	
33	進貢使	雍正 6 年正月23日以前	雍正 6 年 3 月15日以降	毛汝龍、鄭廷極	
34	進貢使	雍正 7 年10月10日以前	雍正 7 年11月15日以降	毛鴻基、鄭秉彞	
35	進貢使	雍正 9 年11月12日	雍正10年 3 月 8 日	向克濟、蔡文河	

番号	使 節	北 京 到 着 日	北 京 出 発 日	正 副 使 など	備 考
36	進貢使	雍正11年12月25日	雍正12年3月9日	溫思明、鄭儀	
	【雍正12年の進貢使は清朝による一貢免除措置のため派遣を断念】				
37	進貢使	乾隆2年10月24日	乾隆3年2月8日	毛光潤、鄭国柱	
38	慶賀使	乾隆3年12月20日以前	乾隆4年3月3日以降	向啓猷、金震	
39	進貢使	乾隆4年12月10日以前	乾隆5年2月28日以降	向維豪、蔡鏞	
40	謝恩使（御書）	乾隆6年12月20日以前	乾隆7年2月21日以降	翁鴻業、蔡其棟	* 4
41	進貢使	乾隆8年12月14日以前	乾隆9年2月24日以降	毛文和、蔡用弼	
	【乾隆9年の進貢使は清朝による一貢免除措置のため派遣を断念】				
42	進貢使	乾隆12年12月25日	乾隆13年3月7日	毛允仁、梁珍	
43	進貢使	乾隆14年12月25日	乾隆15年3月6日	向永成、鄭秉哲	
44	進貢使	乾隆17年4月21日以前	乾隆17年5月20日以降	毛元烈、阮為標	
45	進貢使	乾隆19年正月27日以前	乾隆19年2月23日以降	向邦鼎、楊大壯	
46	進貢使	乾隆20年11月17日	乾隆21年正月	毛元翼、蔡宏謨	
47	謝恩使（冊封）	乾隆22年9月1日	乾隆22年10月16日	馬宣哲、鄭秉哲	
48	進貢使	乾隆22年11月27日	乾隆23年正月8日	向全才、阮趙群	
49	進貢使	乾隆24年12月21日以前	乾隆25年2月14日以降	毛世俊、鄭士綽	
	【乾隆25年の進貢使は清朝による一貢免除措置のため派遣を断念】				
50	進貢使	乾隆28年11月8日	乾隆29年2月7日	馬国器、梁煌	
51	進貢使	乾隆30年12月20日以前	乾隆31年2月19日以降	向廷器、鄭秉和	
52	進貢使	乾隆32年12月13日以前	乾隆33年2月12日以降	阿必振、阮大鼎	
53	進貢使	乾隆35年正月21日	乾隆35年3月6日	毛德義、毛維基	
54	進貢使	乾隆36年12月4日以前	乾隆37年2月10日以降	毛自煥、魏猷蘭	
55	進貢使	乾隆38年12月2日以前	乾隆39年2月5日以降	向宜謨、毛景成	
56	進貢使	乾隆40年12月8日以前	乾隆41年2月6日以降	向崇猷、蔡懿	
57	進貢使	乾隆42年12月17日	乾隆43年2月18日	翁宏基、鄭鴻勳	
58	進貢使	乾隆44年12月	乾隆45年2月28日以降	金有華、蔡煥	
59	進貢使	乾隆47年正月8日以前	乾隆47年2月	向翼、毛景昌	
60	進貢使	乾隆48年12月21日	乾隆49年2月26日	毛廷棟、蔡世昌	

番号	使 節	北 京 到 着 日	北 京 出 発 日	正 副 使 など	備 考
61	進貢使	乾隆50年12月24日	乾隆51年 2 月18日以降	向猷、毛景裕	
62	進貢使	乾隆52年12月20日	乾隆53年 2 月 6 日以降	翁秉儀、阮延宝	
63	謝恩使 (御書)	乾隆54年12月17日	乾隆55年 2 月 3 日	向処中、鄭永功	* 5
64	進貢使	乾隆56年12月13日	乾隆57年 2 月	馬繼謨、陳天龍	
65	謝恩使 (御書)	乾隆58年12月 5 日	乾隆59年正月24日以降	毛国棟、毛廷柱	* 6
66	進貢使	乾隆60年12月20日	嘉慶元年正月 8 日	向文鳳、鄭作霖	
67	慶賀使	嘉慶 2 年12月 9 日	嘉慶 3 年正月29日	東邦鼎、毛廷柱	
68	進貢使	嘉慶 4 年12月19日	嘉慶 5 年正月16日から21日へ	向国垣、曾謨	* 7
69	謝恩使 (冊封)	嘉慶 6 年 2 月23日	嘉慶 6 年 5 月 8 日	毛国棟、鄭得功	
70	進貢使	嘉慶 6 年 4 月 1 日	嘉慶 6 年 5 月10日	向必顕、阮翼	
【嘉慶 7 年の進貢使は派遣されるも進貢両号船が往路で遭難、福州に到着できず】					
71	進貢使	嘉慶10年12月17日	嘉慶11年正月25日	毛廷勳、鄭国鼎	
72	進貢使	嘉慶12年12月13日	嘉慶13年 2 月 2 日	楊克敦、蔡邦弼	* 8
【嘉慶13年の進貢使は清朝による一貢免除措置のため派遣を断念】					
73	謝恩使 (冊封)	嘉慶14年 2 月11日	嘉慶14年 3 月12日	毛光国、鄭章観	
74	進貢使	嘉慶16年 9 月26日	嘉慶16年10月21日	向国柱、蔡肇業	
75	進貢使	嘉慶18年正月 7 日	嘉慶18年 2 月 5 日	向謹、毛廷器	
76	進貢使	嘉慶19年12月20日	嘉慶20年 2 月 8 日	向斌、鄭嘉訓	
77	進貢使	嘉慶21年12月15日	嘉慶22年 2 月 8 日	毛維憲、蔡次九	
78	進貢使	嘉慶23年12月15日	嘉慶24年 2 月 3 日	毛維新、鄭克新	
79	進貢使	嘉慶25年12月17日	道光元年 2 月 2 日	向邦正、蔡肇基	
80	慶賀使	道光 2 年 6 月29日	道光 2 年 7 月23日	向廷謀、鄭文殊	
81	進貢使	道光 2 年12月27日	道光 3 年 2 月 4 日	毛樹徳、王士惇	
82	進貢使	道光 4 年12月26日	道光 5 年 2 月 2 日	向廷楷、梁光地	
83	謝恩使 (御書)	道光 6 年12月23日	道光 7 年 2 月 4 日	馬開基、梁文翼	* 9
84	進貢使	道光 8 年12月20日	道光 9 年 2 月 6 日	毛世輝、楊徳昌	
85	進貢使	道光10年12月18日	道光11年 2 月 6 日	向国璧、王不烈	
86	進貢使	道光12年12月23日	道光13年 2 月 6 日	向永昌、鄭擇中	

番号	使 節	北 京 到 着 日	北 京 出 発 日	正 副 使 など	備 考
87	進貢使	道光14年12月19日	道光15年2月6日	向如山、紅泰熙	
88	進貢使	道光16年12月15日	道光17年2月4日	向大然、孫光裕	
89	進貢使	道光18年12月21日	道光19年2月1日から4日へ	章鴻勳、林奕海	
90	謝恩使（冊封）	道光19年3月5日	道光19年4月4日	翁寛、楊徳昌	
91	進貢使	道光21年閏3月6日	道光21年4月6日	向国鼎、林常裕	
92	進貢使	道光22年12月26日	道光23年2月4日	向紹元、魏恭儉	*10
93	進貢使	道光24年12月17日	道光25年2月9日	毛嘉榮、鄭元偉	
94	進貢使	道光26年12月18日	道光27年2月4日	向元謨、梁必達	
95	進貢使	道光28年12月23日	道光29年2月6日から9日へ	向統績、鄭元觀	
96	慶賀使	道光30年12月19日	咸豐元年2月6日	夏超群、毛有増	*11
97	進貢使	咸豐3年正月18日	咸豐3年2月20日	毛種美、蔡士俊	
98	謝恩使（御書）	咸豐5年11月23日	咸豐6年正月10日	向邦棟、毛克進	*12
99	進貢使	咸豐7年3月18日	咸豐7年5月18日から21日へ	向有恒、阮宣詔	
100	進貢使	咸豐9年6月4日	咸豐9年7月22日	翁俊、阮孝銓	
【咸豐10年の進貢使は派遣されるも戦乱による交通不通のため上京できず】					
【同治元年の進貢使は派遣されるも戦乱による交通不通のため上京できず】					
101	慶賀使	同治3年11月30日	同治4年2月1日	馬文英、毛克述	
102	進貢使	同治4年12月18日	同治5年2月6日	東国興、毛発榮	
103	謝恩使（御書）	同治6年5月19日以前	同治6年7月2日以降	毛文彩、魏掌治	*13
104	謝恩使（冊封）	同治6年8月15日	同治6年10月17日	馬朝棟、阮宣詔	
105	進貢使	同治8年8月20日	同治8年10月22日	向文光、林世爵	
106	進貢使	同治10年2月2日	同治10年4月2日	楊光裕、蔡呈禎	
107	進貢使	同治12年3月6日	同治12年5月18日以降	向徳裕、王兼才	
108	進貢使	光緒元年2月9日	光緒元年5月10日	毛精長、蔡呈祚	

- *1：往路は康熙4年5月29日の時点で杭州に滞在。
*2：北京出発日は康熙8年2月28日の可能性もあり。
*3：北京出発日は康熙27年11月13日の可能性もあり。
*4～6・9・12・13：このときの謝恩使（御書）は進貢使と兼任。
*7・11：このときの慶賀使は進貢使と兼任。
*8：北京出発日は嘉慶13年2月1日の可能性あり。
*10：北京出発日は道光23年2月7日の可能性あり。

*典拠資料：『那覇市史資料篇』第1巻6家譜資料2（以下『久米村系家譜』）、『那覇市史資料篇』第1巻7家譜資料3（以下『首里系家譜』）、『那覇市史資料篇』第1巻8家譜資料4（以下『那覇・泊系家譜』）、『歴代宝案』校訂本第1・3・4・5・7・8・9・11・12・13・14冊、『歴代宝案』台湾本第6・10・冊、『清代中琉関係檔案三編』、『聖祖実録』、『明治四十年十月史料』（沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫蔵、「『内務省文書』とその紹介」（『史料編集室紀要』第12号））所収「帰唐船改帳」、「卯秋走接貢船帰帆改日記」（『琉球王国評定所文書』第1巻）所収「北京往還みやたいり御双紙」、「辰秋走接貢船帰帆」（『琉球王国評定所文書』第2巻）所収2-2号文書から作成した。

2. 北京滞在期間をめぐる全体状況

(1) 琉球使節の朝貢回数

琉球の王権・国家による清朝への朝貢回数は、康熙年間から同治年間までのあいだに113回を数える。派遣された朝貢使節は進貢使、謝恩使（冊封）、謝恩使（御書）、慶賀使である。表1に見えるように、113回のうち実際に北京に上京したのは108回であった⁽¹⁰⁾。

108回のうちわけは、康熙年間が29回、雍正年間が7回、乾隆年間が30回、嘉慶年間が13回、道光年間が17回、咸豊年間が4回、同治年間が8回（番号108を含む、以下同じ）である。使節で分類すると進貢使が86件、謝恩使（冊封）が8件、謝恩使（御書）が7件、慶賀使が7件ということになる⁽¹¹⁾。

派遣されたものの、上京できなかった朝貢使節（いずれも進貢使）が5件存在する。康熙5（1666）年、咸豊10（1860）年、同治元（1862）年の3件は、福州に到着しながら戦乱などのため上京できなかったものである。これに対して、康熙61（1722）年と嘉慶7（1802）年の2件は、進貢頭号船が往路で遭難したため福州に到着できなかったものである。

ほかにも、貢期であるにも関わらず進貢使を派遣できなかった例が6件存在する。康熙13（1674）年と康熙15（1676）年の2件は三藩の乱による戦乱のため朝貢することができなかった。また、雍正12（1734）年、乾隆9（1744）年、乾隆25（1760）年、嘉慶13（1808）年の4件は、清朝によるいわゆる一貢免除の措置を受容して朝貢を断念したものである⁽¹²⁾。

ここにおいて、康熙年間から同治年間までのあいだ、福州に到着したものの上京することができなかつたり、派遣自体ができなかつた進貢使が11件存在することがわかる。康熙年間4件、雍正年間1件、乾隆年間2件、嘉慶年間2件、咸豊年間1件、同治年間1件である。

(2) 北京到着時期の分布

図1から図3は福州を出発した琉球使節が北京に到着した時期を月別に分類したものである。清代を通して見てみると、すべての月にわたっていることがわかる（図1）。12月はほかの月と比較して圧倒的に多く44件存在する。全体の約4割が12月に北京に到着していたことになる。しかしながら、雍正年間までは全体の36件のうち27件が6月から11月に分布している（図2）。この時期に北京に到着した例は清代を通じ39件存在するが、そのなかの27件を占めることになる。到着時期が不明なものが康熙年間に4件存在するが、それぞれ北京を出発するのは9月下旬と11月下旬であるため、ほかの例を参考にすると北京に到着したのはおそらく7月から11月のあいだ

図1 康熙年間から同治年間における北京到着時期分布

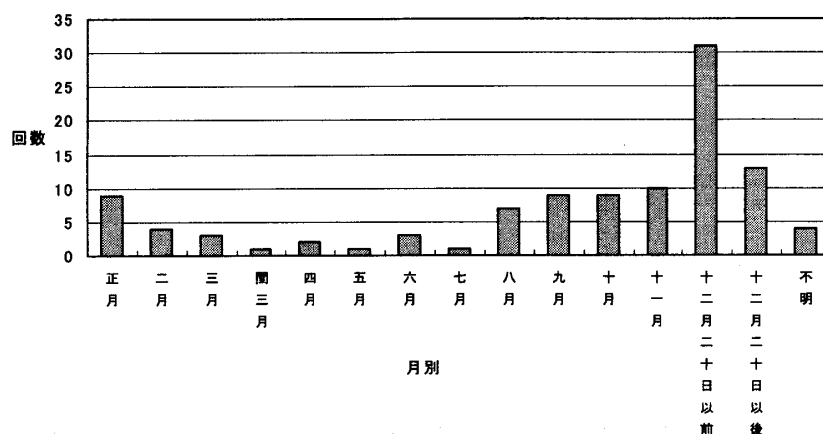


図2 康熙・雍正年間における北京到着時期分布

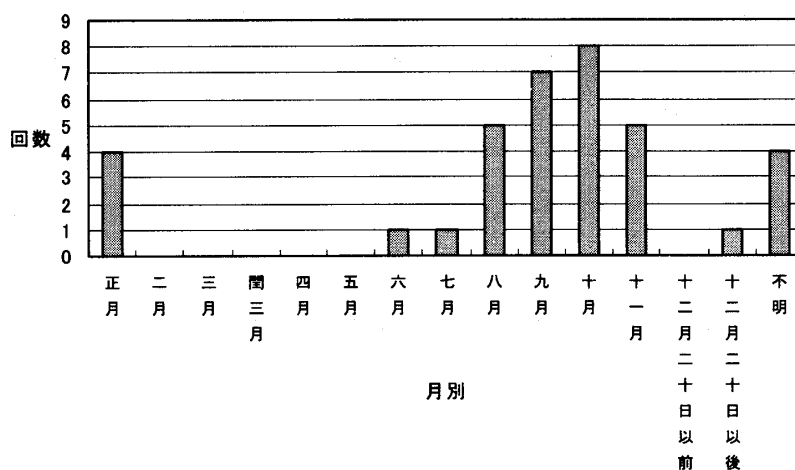
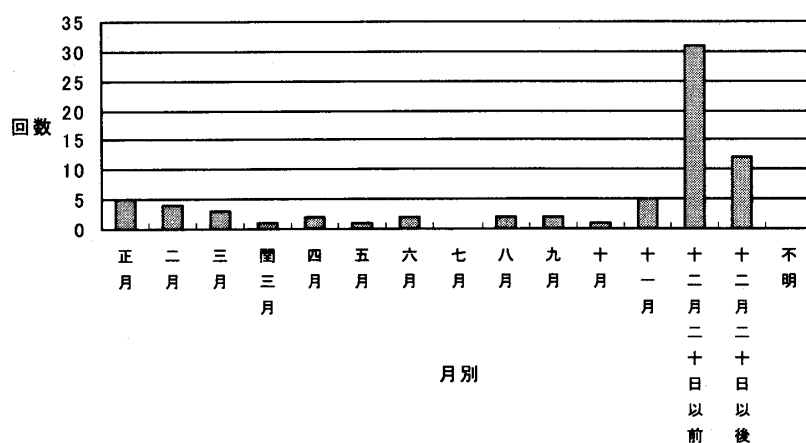


図3 乾隆年間以降における北京到着時期分布



と思われる。雍正年間までは秋から冬にかけて北京に到着していたのである。福州を出発し北京に到着するまでには2・3ヶ月を要することを考えると、雍正年間までは夏に福州を出発することも少なくなかったと思われる。

これに対して、乾隆年間以降は全体の72件のうち43件が12月に集中している（図3）。12月の

44件のうち43件までが乾隆年間以降のものであったのである。乾隆年間から道光年間に絞ってみると、60件のうち42件が12月に集中している。乾隆年間からは多くが12月に北京に到着していたのである。しかも、43件のうち31件は12月20日以前に北京に到着している。はたして、番号86の進貢使は道光12（1832）年12月23日に北京に到着したが、礼部は前例にもとづき期限までに到着できなかった伴送官の職名を調査することを請う上奏文を作成している。そのなかに朝貢使節は12月20日までに北京に到着することが「定制」と一致する旨の同年の諭旨が引用されている（『清代中琉関係档案選編』道光朝128号文書）。このように道光12年の段階では、12月20日までに北京に到着することが以前から「定制」となっていたようであるが、このあとにも12月20日以降に到着した例が3件（番号89、番号92、番号95）存在する。

なお、春から夏にかけて北京に到着している例が清代を通して14件存在することも指摘しておきたい。2月の4件、3月の3件、閏3月の1件、4月の2件、5月の1件、6月の3件は1件を除きすべて乾隆年間以降のものである。14件のうち6件が咸豊年間と同治年間の短期間に集中していることは特徴的といえよう。

（3）北京出発時期の分布

図4から図6は琉球使節が福州に向けて北京を出発した時期を月別に分類したものである。6月を除くすべての月にわたっていることがわかる（図4）。特定の月に限定されないという点では、北京到着時期と同様の傾向が存在するようである。それでは清代を通じて何らかの変化を見いだすことは可能であろうか。

2月はほかの月と比較して圧倒的に多く45件存在する。全体の約4割が2月に北京を出発していたことがわかる。しかしながら、雍正年間までは全体の36件のうち28件が8月から12月に分布している（図5）。この時期に北京を出発した例は清代を通じ32件存在するが、そのなかの28件を占めることになる。雍正年間までは秋から冬にかけて北京を出発していたのである。すなわち、琉球使節は7月から11月にかけて北京に到着し、8月から12月のあいだに出発していたことになる。多くは正月に北京に滞在していなかったのである。

これに対して、乾隆年間以降は全体の72件のうち43件が2月に集中している（図6）。2月の45件のうち43件までが乾隆年間以降のものであったのである。また、乾隆年間から道光年間に絞ってみると、60件のうち40件が2月に集中している。なお、正月の8件もすべて乾隆年間以降のものである。乾隆年間以降は72件のうち51件が正月と2月に集中していることがわかる。乾隆年間からは春に北京を出発していたのである。12月に北京に到着し、多くは正月をはさみ2月に出発したことになる。琉球使節が正月の北京に滞在するようになるのは乾隆年間以降のことなのである。この変化は琉球側に起因するものではなく清朝の正月儀礼をめぐる問題と考えている。琉球使節は乾隆年間において清朝の正月儀礼や宴会に組み込まれたのである。

ところで、夏から秋にかけて北京を出発している例が12件存在することにも触れておきたい。4月の3件と5月の6件、および7月の3件はすべて乾隆年間以降のものである。しかも12件の

図4 康熙年間から同治年間における北京出発時期分布

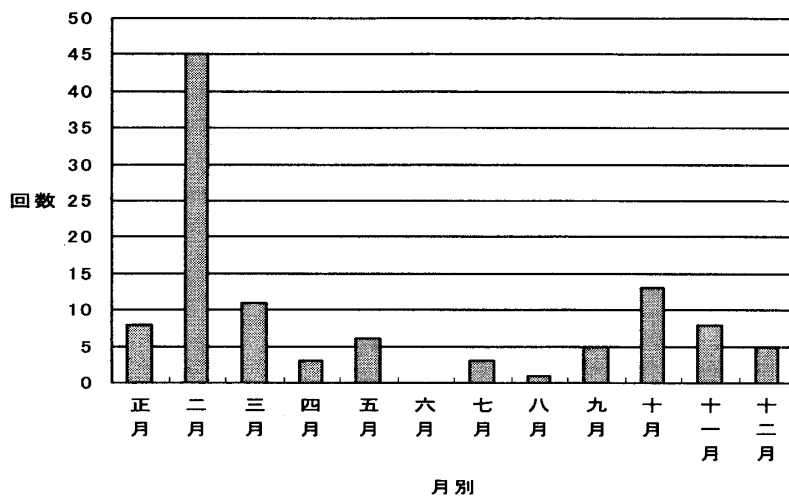


図5 康熙・雍正年間における北京出発時期分布

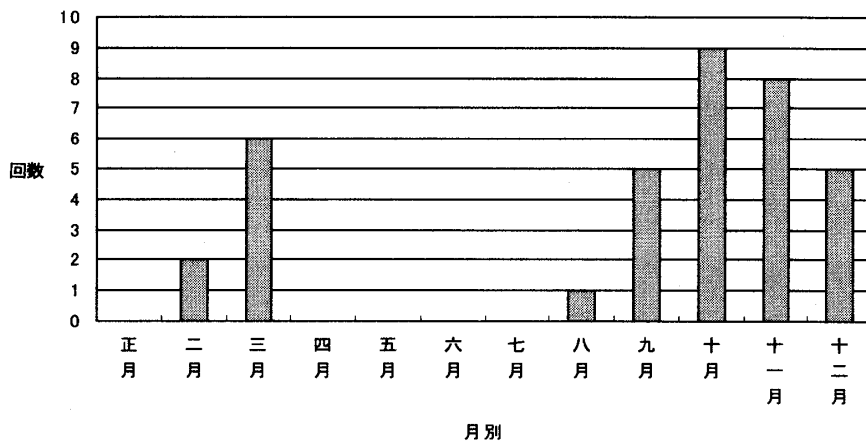
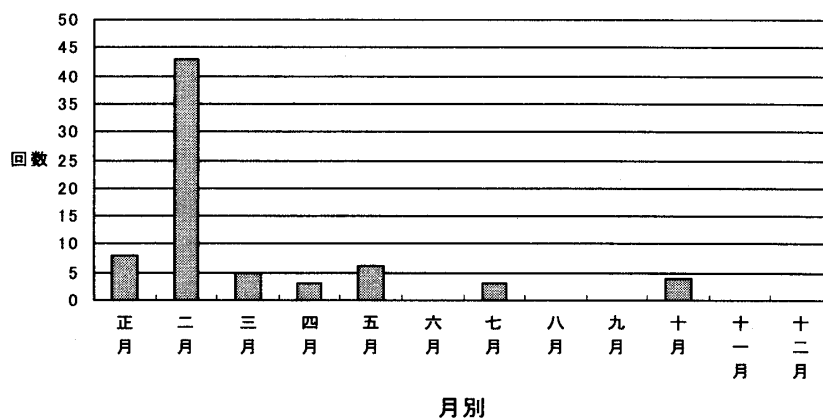


図6 乾隆年間以降における北京出発時期分布



うち6件が咸豊年間と同治年間のものであることは特徴的といえよう。これらの12件は2月から6月にかけて北京に到着した琉球使節と一致し、4月から7月のあいだに北京を出発したのである。この時期、北京滞在期間が変則的になっているのは、太平天国の乱などによって福州から北京までのルートがしばしば不通になったこと、第二次アヘン戦争によって英仏軍が北京を占領し

た影響によるものと考えられる。

さらには、琉球使節が北京に滞在した日数についてもここで触れておきたい。滞在日数は1ヶ月未満から4ヶ月以上5ヶ月未満のあいだに分布する。清代を通じて1ヶ月以上2ヶ月未満がもっとも多く、乾隆年間における到着時期と出発時期の変化にともなう急激な増減は見られない。乾隆年間以降に2ヶ月以上3ヶ月未満が増加する傾向にあるようである。しかしながら、滞在日数が3ヶ月以上4ヶ月未満に及ぶものも雍正年間までに存在する。もっとも滞在期間が短いものは番号66の進貢使で19日間である。反対にもっとも滞在期間が長いものは番号26の進貢使で4ヶ月と28日間である。1ヶ月未満が10例を超えるのに対し、4ヶ月以上5ヶ月未満はこの1例のみである。

3. 正月以外に北京に滞在した琉球使節

(1) 時期的特徴

正月に北京に滞在していない琉球使節は全体の108件のうち45件存在する。なかでも、康熙年間には29件のうち24件を滞在していない例で占めている。雍正年間も7件のうち4件である。36件のうち28件が該当することになる。前述したように、雍正年間までは貢期に派遣された進貢使であっても、正月に滞在していないことのほうが圧倒的に多かったのである。

これに対して乾隆年間から道光年間は様相が異なる。該当する例が60件のうち9件と急激に減少する。乾隆年間には30件のうち番号44（進貢使）、番号47（謝恩使〈冊封〉）の2件のみである。嘉慶年間が13件のうち番号69（謝恩使〈冊封〉）、番号70（進貢使）、番号73（謝恩使〈冊封〉）、番号74（進貢使）の4件、道光年間も17件のうち番号80（慶賀使）、番号90（謝恩使〈冊封〉）、番号91（進貢使）の3件である。琉球使節が正月の北京に滞在するようになるこの時期、特徴的な事例といえよう。9件のうち5件が謝恩使（冊封）と慶賀使である。この間に派遣された謝恩使（冊封）と慶賀使が8件であることを考えると、謝恩使と慶賀使に見いだせる特徴ともいえよう。

ところが、咸豊年間と同治年間には該当する例がふたたび増加する。12件のうち8件である。咸豊年間には4件のうち番号99（進貢使）、番号100（進貢使）の2件、同治年間には8件のうち番号103（謝恩使〈御書〉）、番号104（謝恩使〈冊封〉）、番号105（進貢使）、番号106（進貢使）、番号107（進貢使）、番号108（進貢使）の6件である。

以下では、これまで意識して論じられることのなかった、正月以外の時期に北京に滞在した琉球使節の活動について考察してみたい。45件のなかでも特徴的な乾隆年間以降の17件について、中国商品の買い付けや琉球側の行事である文廟参詣などの問題もあるが、ここでは皇帝への謁見の場に焦点をあてて分類してみたい。正月に北京に滞在した琉球使節と異なるところはあるのだろうか。また、そのとき朝鮮使節などと清朝の儀礼に同席することはあったのだろうか。

(2)「常朝」での皇帝謁見

元旦の朝賀礼（「大朝」のひとつ）に参加できなかった17件の琉球使節は、紫禁城のなかに入り、太和殿前で皇帝謁見儀礼に参加する機会があったのだろうか。17件のうち4件は毎月5日、15日、25日に太和殿前で実施される「常朝」に参加している。元旦ではないものの、太和殿前における清朝の儀礼に参加していたのである。

番号47の謝恩使（冊封、以下省略）は、乾隆22（1757）年9月1日から10月16日まで北京に滞在している。『清代起居注冊録中琉資料匯編－康・雍乾・嘉四朝部分－』によると太和殿前での儀礼に参加したのは10月5日であった。滞在期間の後半にあたることになる。また、9月22日には熱河の避暑山荘から紫禁城に戻る途中の皇帝を北京郊外の清河北野で迎接している（『久米村系家譜』所収「毛氏家譜」五世如苞の項）。このときの謝恩使は熱河から北京に移動する皇帝に謁見した後、太和殿前での儀礼に参加していたのである。

番号69の謝恩使は、嘉慶6（1801）年2月23日から5月8日まで北京に滞在しているが、太和殿前での儀礼に参加したのは4月15日であった。滞在期間の後半にあたることになる。このとき、琉球使節とともに朝鮮使節も参加していた（『清代中琉関係档案五編』76号文書）。

ほかにも、行幸する皇帝を7回にわたって紫禁城の門などで送迎している。『首里系家譜』所収「毛姓家譜」十一世安執（毛国棟）の項によると、2月26日には、北京郊外の東陵から帰着した皇帝を紫禁城の東華門外で迎接している。3月25日には、ふたたび東陵に行幸する皇帝を東華門外で見送っている。4月朔日には、東陵から帰ってきた皇帝を東華門外で迎接している。4月3日には、皇城の太廟に行幸する皇帝を朝鮮使節とともに紫禁城の午門前で送迎している。4月4日には、北京郊外の円明園に行幸する皇帝を前日同様朝鮮使節とともに三座門外⁽¹³⁾で見送っている。4月10日には、外城の天壇から紫禁城に戻る皇帝をやはり朝鮮使節とともに午門外で迎えている。4月16日には、円明園に行幸する皇帝を三座門外で見送っている。このときの謝恩使は、太和殿前での儀礼（「常朝」）に参加しただけでなく、その前後にも皇帝に謁見していたのである。なお、「常朝」のみならず、7回におよぶ皇帝の送迎のうち3回は朝鮮使節が同席していたことがわかる。

番号70の進貢使は、嘉慶6（1801）年4月1日から5月10日まで北京に滞在している。先に北京に到着していた番号69の謝恩使と滞在期間が重複しているが、そもそも嘉慶5（1800）年に派遣された進貢頭号船に謝恩使が乗船し⁽¹⁴⁾、進貢使は進貢2号船に乗船して同時に渡唐したものである。『久米村系家譜』所収「阮氏家譜」七世翼の項によれば、謝恩使と同じ嘉慶6年4月15日の太和殿前での儀礼に参加している。滞在期間の前半にあたることになる。謝恩使と同様に朝鮮使節が同席していたことになる。

また、阮翼の家譜によると、行幸する皇帝を6回にわたって紫禁城の門などで送迎している。4月3日には、太廟から紫禁城に戻る皇帝を午門前で迎接している。謝恩使や朝鮮使節とともに行ったものであろう。4月4日には、円明園に行幸する皇帝を三座門外で見送っている。前日同様謝恩使や朝鮮使節とともに行ったものであろう。4月9日には、天壇に行幸する皇帝を午門外

で送っている。このことは謝恩正使の毛国棟の家譜には記載されていない。4月10日には、天壇から紫禁城に戻る皇帝を午門外で迎接している。謝恩使や朝鮮使節とともに行ったものであろう。4月16日には、円明園に行幸する皇帝を三座門外で見送っている。謝恩使とともに行ったものであろう。さらに、謝恩使が北京を出発した翌日の5月9日には、円明園から戻ってきた皇帝を紫禁城の神武門外で迎接している。このように、謝恩使と同様に「常朝」のほかにも皇帝に謁見しているが、進貢使が北京に滞在していたあいだ、皇帝は半分以上（4月16日から5月9日）を円明園で過ごしていたことになる。皇帝への謁見は滞在期間の前半に集中していたのである。なお、「常朝」のみならず、6回におよぶ皇帝の送迎のうち、少なくとも4回は謝恩使と、3回は謝恩使と朝鮮使節とともに行っていったものと思われる。

番号99の進貢使は、咸豊7（1857）年3月18日から5月21日まで北京に滞在している。『久米村系家譜』所収「阮氏家譜」九世宣詔の項によると、太和殿前での儀礼に参加したのは4月25日であった。滞在期間の中頃にあたることになる。ほかにも、4月12日には、天壇に行幸する皇帝を午門前で仰ぎ見ている。翌日の4月13日には、天壇から帰ってきた皇帝を午門前で迎接している。このときの進貢使は、「常朝」の後は皇帝に謁見する機会はなかったようである。

（3）万寿聖節（皇帝の誕生日）での皇帝謁見

北京に滞在しているあいだ、「常朝」に参加する機会はなかったものの、「大朝」のひとつである万寿聖節に参加している例が17件のうち4件存在する。やはり清朝の儀礼に参加していたのである。その場合は北京郊外にある円明園の正大光明殿と紫禁城内廷の乾清宮であった。

番号74の進貢使は、嘉慶16（1811）年9月26日から10月21日まで北京に滞在しているが、円明園で催された万寿聖節に参加したのは10月6日であった。滞在期間の前半にあたることになる。『久米村系家譜』所収「蔡氏家譜」十四世肇業の項によれば、このときの進貢使は10月3日に円明園に移動し⁽¹⁵⁾、10月7日に北京城内の宿泊施設⁽¹⁶⁾に帰還するまで滞在している。正月には皇帝が滞在する円明園に呼ばれることも少なくないが、ここでは万寿聖節に参加するため移動しているのである。10月6日には、正大光明殿に現れた皇帝に対し中国側官僚とともに慶賀礼を行っている（『清代起居注冊録中琉資料匯編－康・雍乾・嘉四朝部分－』）。

ほかにも、蔡肇業の家譜によると、行幸する皇帝を4回にわたって紫禁城の門などで送迎している。10月1日には、太廟に行幸する皇帝を午門前で仰ぎ見ている。10月2日には、円明園に行幸する皇帝を西三座門外⁽¹⁷⁾で送っている。琉球使節は皇帝が行幸した翌日円明園へ移動したことになる。10月11日には、円明園から戻ってきた皇帝を西三座門外で迎接している。また、10月18日には、皇城の中海の西岸にある紫光閣に行幸する皇帝に神武門外でご機嫌をうかがい回国を請うている。このときの進貢使は、万寿聖節の前後に謁見する機会があったのである。

番号100の進貢使は、咸豊9（1859）年6月4日から7月22日まで北京に滞在しているが、番号74と同様に円明園で催された万寿聖節に参加したのは6月9日であった。このときの進貢使は、北京に到着するとすぐに円明園に移動したことになる。6月8日には、同樂園で芝居を鑑賞し皇

帝を仰ぎ見ている。6月9日には、正大光明殿に現れた皇帝に対し中国側官僚とともに慶賀礼を行っている（『清代中琉関係档案五編』100号文書）。第二次アヘン戦争によって円明園が破壊される前年のことである。『久米村系家譜』所収「阮氏家譜」九世孝銓の項によると、6月16日には朝貢品を貢納していることから、これ以前に北京に帰還していたものと思われる。万寿聖節の後は皇帝に謁見する機会はなかったようである。

番号106の進貢使は、同治10（1871）年2月2日から4月2日まで北京に滞在しているが、万寿聖節に参加したのは3月23日であった。万寿聖節の場合は、番号74や番号100の円明園の正大光明殿から紫禁城内廷の乾清宮へ移動している⁽¹⁸⁾。『清代起居注冊』同治朝第35冊によると、乾清宮に現れた皇帝に対し、王公、大臣、蒙古王、貝勒、貝子、額祚、文武大小官員とともに琉球使節の正副使2名が慶礼を行っている。前日22日には、内廷で王、大臣、蒙古王、貝勒、貝子、額祚、台吉とともに琉球使節の正副使2名に茶菓が下賜されている。3月23日は滞在期間の後半にあたるが、『清代中琉関係档案三編』同治朝93号文書では、正使楊光裕が3月12日以前に作成し、万寿聖節に参加するため北京での滞在延長を申請した稟文が引用されている。

番号107の進貢使は、同治12（1873）年3月6日から5月18日以降まで北京に滞在している。番号106と同様に乾清宮で催された万寿聖節に参加している。このときは滞在期間の前半にあたることになる。『清代起居注冊』同治朝第39冊によると、3月23日、乾清宮に現れた皇帝に対して、番号106と同様に王公、大臣、蒙古王、貝勒、貝子、額祚、文武大小官員とともに琉球使節の正副使2名が慶礼を行っている。前日22日には、やはり内廷で王、大臣、蒙古王、貝勒、貝子、額祚とともに琉球使節の正副使など3名に茶菓が下賜されている。

ほかにも、同書によると、3月11日に正副使と都事（朝京都通事か）の3名が東陵から紫禁城に戻る途中の皇帝を北京郊外の燕郊行宮外で迎接している。北京に到着した直後に郊外へ移動し、万寿聖節よりも前にすでに皇帝に謁見していたのである。また、同書によると、5月26日に内城の雍和宮から帰着した皇帝を朝鮮使節の正副使と書状官の3名が神武門外で迎えているが、琉球使節は見えない。これ以前に北京を出発していた可能性がある。

（4）行幸する皇帝への謁見

17件のなかには「常朝」や「大朝（万寿聖節）」など清朝の儀礼に参加する機会がなかった例が9件存在する。これらは滞在期間中紫禁城のなかに入っていないことになる。しかし、皇帝に謁見する機会がまったくなかったわけではなく、行幸する皇帝を紫禁城の城門などで送迎している例を見いだすことができる。

番号44の進貢使は、乾隆17（1752）年4月21日以前から5月20日以降まで北京に滞在している。関連史料が少なく詳細は不明であるが、残存する史料からは皇帝に謁見した形跡は見いだせない。

一方、番号73の謝恩使は、嘉慶14（1809）年2月11日から3月12日まで北京に滞在している。行幸する皇帝を5回にわたって送迎するなどしている。『歴代宝案』校訂本第9冊2-108-06号文書に付文として収録されている「琉球謝恩使臣在京各時宜單」によると、2月13日には、頤和

園の万寿山に行幸する皇帝を棗園門（位置不明）で仰ぎ見ている。2月16日には、「園（頤和園か）」から紫禁城に帰ってきた皇帝を西三座門外で迎接している。翌2月17日には、東陵に行幸する皇帝を斎化門外（位置不明）で送っている。2月29日には、東陵から帰着した皇帝を東華門内で迎接している。そして、3月3日には外城の先農壇に行幸した皇帝に先農壇門外でご機嫌をうかがい回国を請うている。琉球使節が外城の南側まで移動していることを確認できる珍しい例である。

番号80の慶賀使は、道光2（1822）年6月29日から7月23日まで北京に滞在している。夏に上京した琉球使節のひとつである。行幸する皇帝を2回にわたって送迎するなどしている。『久米村系家譜』所収「紅氏家譜」十六世泰熙の項によれば、7月1日には太廟に行幸する皇帝を午門前で仰ぎ見ている。そして、7月20日には紫禁城の西華門を通過して行幸する皇帝に西華門外でご機嫌をうかがい回国を請うている。

番号90の謝恩使は、道光19（1839）年3月5日から4月4日まで北京に滞在している。行幸する皇帝を3回にわたって送迎するなどしている。『清代起居注冊』道光朝第55冊によると、3月9日に東陵から紫禁城に戻る途中の皇帝を琉球使節の正副使2名が北京郊外の煙郊行宮門外で仰ぎ見ている。琉球使節が北京に到着した時点では、皇帝は紫禁城にいなかったことになる。ほかにも『久米村系家譜』所収「魏姓家譜」九世学源の項によれば、3月15日には外城の永定門から円明園に行幸する皇帝を紅橋（位置不明）で迎接している。3月27日には円明園から帰着した皇帝に神武門外でご機嫌をうかがい回国を請うている。

番号91の進貢使は、道光21（1841）年閏3月6日から4月6日まで北京に滞在している。番号90と同様に夏到北京を出発し、福州に向け進貢ルートを通じたことになる。皇帝を3回にわたって送迎している。『清代起居注冊』道光朝第55冊によると、閏3月9日に礼部の役人によって引率された琉球使節の正副使2名が大紅橋（番号90の紅橋と同じか）で皇帝を迎接している。また、『久米村系家譜』所収「林氏家譜」十四世常裕の項によれば、皇帝が移動した場所は不明であるが、4月朔日に午門前で送迎している。翌4月2日にも皇帝が移動した場所は不明であるが、西三座門外でご機嫌をうかがい回国を請うている。

番号103の謝恩使（御書）は、同治6（1867）年5月19日以前から7月2日以降まで北京に滞在している。夏到北京に滞在した琉球使節のひとつである。『清代起居注冊』同治朝第26冊によると、謁見した場所は記載されていないものの、6月29日には琉球使節の正使が太廟に行幸した皇帝に拝謁し、ご機嫌をうかがっている。

番号104の謝恩使は、同治6（1867）年8月15日から10月17日まで北京に滞在している。『清代起居注冊』同治朝第27冊によると、番号103と同様に謁見した場所は記載されていないものの、9月29日に琉球使節の正副使2名が太廟に行幸した皇帝に謁見し、ご機嫌をうかがっている。

番号105の進貢使は、同治8（1869）年8月20日から10月22日まで北京に滞在している。『清代起居注冊』同治朝第32冊によると、9月30日に琉球使節の正副使2名が太廟に行幸した皇帝を午門外で迎接している。

なお、番号108の最後の進貢使は、光緒元（1875）年2月9日から5月10日まで北京に滞在している。しかし、このときは、上京途中の正月20日に同治帝が死去し、北京滞在中の2月20日には同治帝の皇后が死去した。服喪期間であるのに加え、即位した光緒帝も幼年であるとの理由で結局謁見することはできなかった。『中山世譜』巻13同治13（1874）年条によると、琉球側は皇帝への謁見を求め、福州から琉球使節に同行した河南通事⁽¹⁹⁾を2回にわたって礼部に派遣している。

以上、冗長になったが、17件の琉球使節のうち、8件は「常朝」や万寿聖節などの清朝の儀礼に参加する機会を得、太和殿前や正大光明殿などで皇帝に謁見していた。ここでも清朝の儀礼に組み込まれていたのである。清朝の儀礼に参加する機会を得られなかった9件についても、番号44、番号108の2件を除き、通常の琉球使節と同様に行幸する皇帝を紫禁城の城門や北京郊外送迎するなどして謁見していた。また、逐一触れることはできなかったが、これらの活動は琉球使節が単独で行ったものではなく、礼部の役人などに引率され、中国側官僚に混じってのものであったことにも留意しておきたい。なお、朝鮮使節などほかの朝貢使節との同席を確認できるのは番号69、番号70の2件のみであった。

おわりに

本稿では、ヒトの移動に関する基礎的な作業でありながらこれまで着手されることがなかった、清代における琉球使節の北京滞在期間を明らかにすることを試みた。そのなかで、琉球使節の北京滞在期間は、乾隆年間以降に正月をはさむように変化していることがわかった。

また、正月以外に北京に滞在した琉球使節のほか、正月に北京に到着した例が乾隆年間以降5件存在する（番号45、番号53、番号59、番号75、番号97）。やはり元旦の朝賀礼には参加できなかったことになる。さらには、正月中に北京を出発した例が8件存在する（番号46、番号48、番号65、番号66、番号67、番号68、番号71、番号98）。時期的に連続していたり、正月上旬に出発したものも見いだせる。このなかにも元旦の朝賀礼に参加していない例が存在する。北京での滞在日数をもっとも短い番号66もここに含まれる。

ところで、乾隆年間以降でも咸豊年間と同治年間における北京滞在期間は戦乱の影響を受け変則的であることを指摘した。北京を出発する時期が4月以降になることは福州への到着が遅れることを意味する。これによって琉球側では問題が生じていた可能性がある。最後にこの点について述べておきたい。

「辰秋走進貢船帰帆」（『琉球王国評定所文書』第2巻）には、道光25（1845）年に那覇に帰着した進貢両号船（頭号船・二号船）によってもたらされた文書が収録されている。そこには、福州に滞在する渡唐役人である存留通事が作成し首里王府に宛てた同年4月25日付けの行政文書も含まれている。同文書では進貢両号船が福州を出発する以前の4月21日に福州に帰還していた進貢正副使（番号93の進貢使）の次書きを見いだすことができる。道光24（1844）年の進貢使は、自らが搭乗した進貢頭号船が道光25年に福州から那覇へ出発する前に福州に帰還し、同年福州に

到着した接貢船に乗船して翌年福州を出発したのである。

ところが、北京出発が4月以降にずれ込むと進貢両号船が福州を出発するまでに帰還できないことが想定される。琉球人の居留地である福州琉球館には存留通事以外にも多数の渡唐役人が滞在し、進貢使などの朝貢使節も北京との往還を除けばそこに滞在していた。朝貢使節と福州に滞在する渡唐役人などからなる渡唐使節は、人的組織であるだけでなく、首里王府の行政組織としても機能し、その長官は進貢正使であった⁽²⁰⁾。進貢両号船の福州出発に進貢正副使が間に合わない状態が続くことは、首里王府に送付される行政文書に次書きして保証できないことを意味する。進貢両号船の出発にともなう人的組織の再編成の最終決定を含め、福州における渡唐使節の文書行政に何らかの影響を与えていた可能性がある。すなわち、北京から福州へ帰還する時期の遅延は、進貢両号船による福州から那覇（あるいは首里）へのヒトの移動や情報の伝達とも直接関連する連続した問題であったと考える。

以上、残された課題はすべて他日を期することとしたい。諸賢のご批正を請う次第である。

注

- (1) たとえば、真栄平房昭氏は「北京における恒例の公式行事」としている。真栄平房昭「琉球使節の異国体験」（『国際交流』59号、1992年）。
- (2) 明代における暹羅使節の全体状況については、松浦章「萬曆四十五年暹羅国遣明使—明代朝貢形態の様相—」（『増訂 使琉球録解題及び研究』榕樹書林、1999年）がある。
- (3) 紙屋敦之氏は「琉球と朝鮮は北京で交流の回路がつながっていた」旨を述べている。紙屋敦之「北京の琉球使節」（『月刊歴史手帖』23—6号、1995年）。
- (4) 徐恭生「清代の琉球朝京使節の研究」（『中国福建省・琉球列島交渉史の研究』第一書房、1995年）、拙稿①「近世琉球の渡唐使節における特使の様相—清朝との通交期を中心に—」（『沖縄キリスト教短期大学紀要』第29号、2001年）、拙稿②「近世琉球の渡唐使節における謝恩使—進貢頭号船への「坐駕」を中心に—」（『第八回琉中歴史関係国際学術会議論文集』2001年）などがある。
- (5) 前掲注(4)の徐論文、頼正維「清代福建委派官員護送琉球使臣赴京考」（『第五屆中琉歴史関係学術会議論文集』1996年）。
- (6) そのようななかで、前掲注(5)の頼論文では、乾隆年間から同治年間にいたる伴送官と琉球使節の福州出発日とともに北京到着予定日が明示されている。
- (7) 陳捷先「清代琉球使在華行程与活動略考」（『第二回琉中歴史関係国際学術会議報告琉中歴史関係論文集』1989年）、前掲注(1)の真栄平論文、同氏「琉球使節による中国見聞レポート—内閣文庫所蔵『中華之儀二付申上候覚』をめぐって」（『第四回琉中歴史関係国際学術会議琉中歴史関係論文集』1993年）、戈斌「清代の宮中档案から見た琉球国の朝貢活動」（『第一回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム』1993年）、前掲注(3)の紙屋論文、拙稿③「琉球使節と清朝皇帝の行幸」（『第九屆中琉歴史関係学術会議論文集』2005年刊行予定）などがある。

る。前掲注(1)の真栄平論文からは都市空間をめぐる視点に示唆を受けた。

- (8) 陳尚勝「明清時代の朝鮮使節与中国記聞—兼論〈朝天録〉和〈燕行録〉的資料価値—」(『海交史研究』2001年第2期、2001年)、林基中『燕行録研究』(一志社、2002年)、夫馬進「日本現存朝鮮燕行録解題」(『京都大學文學部研究紀要』第42号、2003年)。なお、夫馬論文では林著書における書誌情報の問題点を指摘している。
- (9) 明清交替期における琉球の王権・国家の南明政権、清朝への朝貢については、真栄平房昭「近世琉球の対中国外交—明清動乱期を中心に—」(『地方史研究』197号、1985年)、田名真之「明清交替期の琉球」(『第六屆中琉歴史関係學術研討会文集』2000年)がある。
- (10) 順治年間に清朝に派遣された琉球の朝貢使節は4件存在する。そのうち3件が北京に上京している。したがって、順治年間を含めれば、117件の朝貢使節が派遣され、そのうち上京したのは111件ということになる。

はじめて北京で清朝皇帝に謁見したのは、もともとは隆武2(1646)年に福州の隆武政権に派遣された慶賀使である。復路、海賊に襲撃された琉球使節が福州に戻ったところ、福州は陥落し、そこには清朝の貝勒將軍が駐屯していた。琉球使節は貝勒將軍に召喚され、そのなかの3名が貝勒將軍に引率され北京に上京したのである。北京滞在期間は順治4(1647)年4月7日から6月であった(『久米村系家譜』所収「県史編纂史料・那覇ノ部」金氏八世正春の項)。このときに発給された勅の日付は同年6月8日である(『歴代宝案』校訂本第1冊1-03-02号文書)。2回目に上京したのは、順治6(1649)年に清朝への「投誠」のために派遣された官員である。そのなかの3名が順治7(1650)年2月18日には福州を出発しており(『歴代宝案』校訂本第1冊1-09-02号文書)、翌年9月8日の段階で北京に滞在している(『歴代宝案』校訂本第1冊1-03-04号文書)。同年11月5日の段階では福州に帰着していたようである(『歴代宝案』校訂本第1冊1-09-03号文書)。3回目に上京したのは、順治10(1653)年に派遣された慶賀使である。同年6月(7月か)には18名が福州を出発したもののと思われ(『歴代宝案』校訂本第1冊1-09-05号文書)、翌年の3月には北京に到着し、6月15日の段階で北京に滞在している(『歴代宝案』校訂本第1冊1-05-02号文書)。なお、順治7(1650)年にも慶賀使が派遣されたが往路の海上で遭難している(『歴代宝案』校訂本第1冊1-09-05号文書)。

- (11) 謝恩使(御書)が7件のうち6件、慶賀使は7件のうち2件の合計8件が進貢使と兼任である。したがって単独で派遣された進貢使は86件であるが、特使が兼任した8件を含めれば、貢期に派遣された進貢使は94件になる。清朝に派遣された特使については、前掲注(4)の拙稿①がある。
- (12) 清朝による一貢免除の措置に対する首里王府の対応については、豊見山和行「琉球の対清外交について—雍正・乾隆期の一貢免除問題を中心に—」(『琉球王国評定所文書』第3巻、1989年)がある。のち、同氏『琉球王国の外交と王権』(吉川弘文館、2004年)に「一貢免除問題からみた対清外交」として収録。

- (13) 後掲注(17)の天安門の外側の公生門（西三座門）である可能性もあるが、1939年に発行された「詳密北京市街図」には、紫禁城西側の北海の南、中海の北に架かる御河橋の東側に三座門が見える。あるいはこの門である可能性もあろう。
- (14) 乾隆年間以降に派遣された謝恩使（冊封）が進貢頭号船に乗船していた点については、前掲注(4)の拙稿②がある。
- (15) 「卯秋走接貢船帰帆改日記」（『琉球王国評定所文書』第1巻）には道光22年の進貢正副使ら5名によって作成された朝貢活動の報告書である「北京往還みやたいり御双紙」が収録されている。そこでは、道光23年正月9日に道光帝が円明園に行幸したことにともない、15日に琉球使節（進貢正副使）も円明園の正大光明殿に召し出されているが、琉球使節は大樹庵という施設に宿泊している。なお、「辰秋走進貢船帰帆」（『琉球王国評定所文書』第2巻）にも、「勢頭・大夫・官生共より申越候書状書付」のひとつとして、道光24年の進貢正副使が作成した朝貢活動の報告書が収録されている。琉球使節は道光25年正月にも円明園に召し出されているが、ここでは、宿泊したのは大植園と見える。

『光緒順天府志』京師志十七、寺觀二によれば、大樹庵は華家屯に位置し、康熙年間に設置されたとある。大植園については不明である。

- (16) 北京において琉球使節が宿泊した会同四訳館などの施設については、戈斌「清代の琉球館舎の研究」（『第二回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』1995年）、田中千夏「第6回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム参加記」（『史料編集室紀要』第27号、2002年）、松浦章『清代中国琉球貿易史の研究』（榕樹書林、2003年）序論第2章「清代対外関係における北京会同館・福州柔遠駅」がある。琉球使節は、正陽門内、正陽門外、宣武門内、宣武門外の内城や外城に設置された会同館や紫禁城西華門外の都虞司衙門などに宿泊していた。蔡肇業の家譜によれば、このときは四訳館（会同四訳館）に宿泊していた。

ところが、番号9の場合は、暹羅使節がすでに会同館に宿泊していたため大仏寺に滞在している（『首里系家譜』所収「田姓家譜」四世方房〈田逢喜〉の項）。北京滞在期間がもっとも長い番号26では、滞在期間の前半は会同館に宿泊しているが、後半は昆陵菴に移動している（『久米村系家譜』所収「蔡氏家譜抄」十一世温の項）。

大仏寺については、『唐土名勝図絵』巻之三、京師、内城に収録された内城の東北部分の絵図によれば、大仏寺自体は見えないものの、鐘樓の東側、安定門内の順天府署の西側、歩軍衙門の北側に大仏寺胡同を確認することができる。ほかにも同書では、皇城の東の外側部分の絵図で、王府大街の北端近くで道路に面した西側、安定門大街の南詰めで道路に面した東側に大仏寺を確認できる。「清乾隆北京城図」（『明清北京城図』地図出版社、1986年）でも、鐘樓の東側、順天府衙門の西側、鼓樓東大路の北側に大仏寺が見える（地図上では乙六）。また、朝陽門大街西詰め近く、王府大街の北詰め近く、安定門大街の南詰めで道路に面した東側にも大仏寺を確認できる（地図上では丙七）。道路をはさんで高麗館があり、大仏寺の東側すぐ近くには関帝廟を見いだせる。ともに『唐土名勝図絵』の位置と一致する。琉球使

節が宿泊した大仏寺がどちらであるかは現在のところ不明であるが、ふたつの大仏寺はいずれにしても内城の東側に位置することになる。

2004年8月に北京を訪れる機会を得、双方の大仏寺付近を踏査してみたところ、鐘楼近くの大仏寺は現存しておらず、大仏寺胡同の名称も残存していなかった。これに対して、安定門大街南詰めの大仏寺は現存していないものの、バスの停留所や道路（「大仏寺東街」）にその名を留めていた。毘陵菴の位置については現在のところ不明である。

- (17) 陳文良主編『北京伝統文化便覧』（北京燕山出版社、1992年）の「公生門」の項では、皇城の天安門の外側に増築された壁の両側に設置された公生門の別称として東三座門、西三座門をあげている。辛亥革命後に撤去されたようであるが、1939年に発行された「詳密北京市街図」では天安門の外側の道路に東三座門大街、西三座門大街という名称が残っている。円明園は外城西側の西直門方面にあたるが、西三座門は天安門の外側（西側）の公生門である可能性がある。琉球使節が行幸する皇帝を西三座門外で送迎する場合、行幸先は圧倒的に円明園であることが多いが、1例ではあるものの、番号78の進貢使は嘉慶24年正月17日に外城の祈穀壇に行幸する皇帝を送っている（『久米村系家譜』所収「鄭氏家譜」一六世克新の項）。したがって、西三座門が紫禁城の南側の門であっても必ずしもおかしくはないと考える。しかしながら、前掲注(13)であげた御河橋の東側に位置する三座門である可能性もある。

また、梁思成『清式营造则例』（中国建筑工业出版社、1981年）には、宮門（西三座門）というタイトルが付いた写真が掲載されている。『唐土名勝図絵』巻三、京師、内城に絵図が収録された、城壁に門楼が設置された西直門のような高い門ではなく、正面手前右側に写る樹木や門の奥に写る並木と比較すると比較的低い門のように思える。朱色に塗られた門の前には石碑のようなものが見える。

- (18) 英仏軍によって破壊されたあとの円明園と朝貢使節の関係については、前掲注(8)の夫馬論文がある。同治12年の冬至使正使に随行した姜璋は、翌年正月23日に円明園の遺跡を訪れている。琉球使節には、現在のところこのような活動を見いだすことができない。
- (19) 河口通事（土通事）の職掌については、西里喜行「中琉交渉史における土通事と牙行（球商）」（『琉球大学教育学部紀要』第50集、1997年）がある。
- (20) 渡唐使節が行政組織として機能していたことについては、拙稿④「福州における琉球使節の構造－清代の存留通事像を中心に－」（『歴代宝案研究』第9号、1998年）がある。

付記：本稿は、平成12年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究(A) (1)）（課題番号12309001）研究成果報告書『8－17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流－海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に－（下）』に収録された、拙稿「琉球使節の北京滞在期間」を一部訂正して作成したものである。

琉球使节北京滞留考

……以清代的琉中交往力中心

深澤 秋人

从17世纪中叶到19世纪后半叶，琉球与清朝建立并保持了通交（朝贡）关系。根据清朝规定的贡期，首里王府派遣以进贡使为首的使节经由福州前往北京朝贡。

能够在元旦参加于紫禁城太和殿前举行的谒见皇帝的礼仪可称得上是琉球使节在京的首要活动。以往对琉球使节在京活动的探讨倾向于以使节正月期间必然在京为前提，但是没能明示整个清代琉球使节滞留京城的具体时间。

因此，本文将详述琉球使节从康熙朝到同治朝期间滞留北京的各个时段，并尝试爬梳整理各时段特征。通过分析可知：自康熙朝到雍正朝，琉球使节抵达京城的时间在6月—11月之间，离开京城的时间在8月—12月之间；但是进入乾隆朝之后则变成12月抵京，度过正月，于2月离京。也就是说琉球使节于正月期间滞留北京始自乾隆朝。发生这种变化，究其原因并不在琉球方面，而是清廷举行正月礼仪使然。也就是说，乾隆年间琉球使节被清廷纳入到正月礼仪制度之中。

其次，通过分析还发现，乾隆朝以后的咸丰、同治年间，琉球使节到京及滞京时间发生了不规则变化。其直接原因有以下两点：1、太平天国运动的爆发致使福州往京城道路受阻；2、第二次鸦片战争英法联军占北京，致使琉球人无法入京。使节高离京时间一旦推迟也就延误了抵达福州的时间。这也就意味着有可能影响到由福州发往首里王府的“渡唐船”传递信息。

此外，本文还探讨了乾隆朝之后，除正月期间之外琉球使节是否谒见清朝皇帝。结果发现不但如此，这些使节还参与了太和殿的“常朝”以及在正大光明殿举行的朝廷礼役。